



Title	心理動詞と“了”の共起関係について：日本語母語話者が産出した誤用例の分析を通して
Author(s)	張, 恒悦
Citation	外国語教育のフロンティア. 2023, 6, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

心理動詞と“了”の共起関係について ——日本語母語話者が産出した誤用例の分析を通して——

On the Co-occurrence of Psych verb and “le (了)” : An Error Analysis for Japanese Mandarin Learners

張 恒悦

要約

日本語を母語とする中国語学習者の会話や作文において、(1)－(3)のように、心理動詞の後ろに不必要な“了”が付けられていることがよく見られる。

- (1) * 看到那些高楼时，我吃惊了。
(それらのビルを見た時、驚いた。)
→ 看到那些高楼时，我很吃惊。
- (2) * 爬上长城，我感动了。
(万里の長城にのぼって、感動した。)
→ 爬上长城，我很感动。
- (3) * 这本书 300 页！我读完了，非常累了。
(この本は 300 頁！私は読み終えたが、非常に疲れた。)
→ 这本书 300 页！我读完了，非常累。

このタイプの誤用について、先行研究では指摘されているものの、誤用の原因および教学上の対応策はあまり検討されていない。

本稿では、日本語母語話者が産出した誤用例への分析を踏まえ、中日両言語の比較対照の観点から、中国語の心理動詞と“了”の共起関係について論じた。まず、中日両言語の心理動詞における統語的相違の分析を通して、中国語の心理動詞の特徴を明らかにし、さらにその特徴が日本語母語話者にとっての盲点となりやすいことを指摘した。次に、中国語の心理動詞と結合する場合の“了”の役割について考察を加えた。過去の助動詞「た」の発想により心理動詞の後ろに付けられた“了”は、アスペクト助詞“了 1”ではなく、語気助詞“了 2”として働くことを明らかにした。最後に、“了”を伴った心理動詞という表現と程度副詞“很”など伴った心理動詞という表現の差異を分析した上で、中国語教育に対する提案も行なった。

キーワード：心理動詞、“了”、誤用

1. はじめに

日本語を母語とする中国語学習者が産出した“了”の誤用には、さまざまな原因が考えられるが、その内の一つに、ひたすら心理動詞に“了”を付けるということが挙げられる。

- (1) * 看到那些高楼时, 我吃惊了。
(それらのビルを見た時、驚いた。)
→看到那些高楼时, 我很吃惊。
(2) * 爬上长城, 我感动了。
(万里の長城にのぼって、感動した。)
→爬上长城、我很感动。
(3) * 这本书 300 页! 我读完了, 非常累了。
(この本は 300 頁! 私は読み終えたが、非常に疲れた。)
→这本书 300 页! 我读完了, 非常累。

以上から明らかなように、(1) – (3) はいずれも心理動詞が“很”などの程度副詞と共起すべき文脈であるが、日本語母語話者は「過去」を表す助動詞「た」= “了”という感覚から、心理動詞に“了”を付けた形での表現を産出しやすい傾向にある。

本稿では、日本語母語話者が産出した誤用例を手掛かりに、中日両言語の比較対照を通して、中国語の心理動詞と“了”の共起関係について検討する。まず、中日両言語における心理動詞の統語的相違の分析を行い、中国語の心理動詞の特徴を明らかにする。それから、心理動詞と結合した場合の“了”の役割を考察する。最後に、“了”を伴った心理動詞という表現と、程度副詞を伴った心理動詞という表現における意味的相違を明らかにした上で、中国語教育への提言を行いたい。

2. 先行研究

上記のような誤用例は、日本人学習者の会話や作文に高頻度に現れているため、郭春貴 (2010)、蘆濤 (2007) においても多く挙げられている。しかし、これらの先行研究では、誤用の指摘・訂正にとどまり、誤用の原因には言及されていない。また、なぜ心理動詞が“了”ではなく、程度副詞と共起しなければならないかという問題についても触れられていない。

3. 中日両言語における心理動詞の相違

日本語において、心理動詞 (以下 JV と記す) は、その活用から分かるように、常に動詞的文法ルールを守る。例えば、

驚く	驚いた	驚かない	驚かなかった	驚いている	驚いていた	……
感動する	感動した	感動しない	感動しなかった	感動している	感動していた	……
疲れる	疲れた	疲れない	疲れなかった	疲れている	疲れていた	……

この点において、動作や状態などを表す動詞とは何の変りもない。例えば、

行く	行った	行かない	行かなかった	行っている	行っていた	行かせる	……
太る	太った	太らない	太らなかった	太っている	太っていた	太らせる	……

よって、日本語の動詞カテゴリーは均質であり、その一員である JV は、他の動詞と統語的一致性を有すると言える。

ところが、中国語の動詞カテゴリーには、そういった一致性が見られない。現に、中国語の心理動詞（以下 CV と記す）と、動作動詞との間には大きな違いが存在している。

中国語の動作動詞は、通常、単独で述語になり得るが、程度副詞の修飾を受けることはできない。例えば、

- (4) a. 我去。
- b. *我很去。

しかし、CV は、動作動詞とは対照的に、単独で述語になりにくく、程度副詞を付けることで始めて自然な表現となる。例えば、

- (5) a. *我吃惊。
- b. 我很吃惊。

ここで、CV を形容詞とリンクして考えたい。周知の通り、中国語の形容詞も単独で述語になりにくく、程度副詞を伴うのが特徴である。例えば、

- (6) a. *他聪明。
- b. 他很聪明。

よって、CV は述語になる際、動作動詞ではなく、形容詞と同じ文法的振る舞いをし、形容詞との類似性を呈する。

このように、CV が形容詞と類似性をもつのは、CV は動作ではなく状態として捉えられるためであると考えられる。

中国語では、「晴れる」「曇る」「太る」「痩せる」「乾く」「湿る」などの意味を示す際に動詞ではなく、形容詞で表現する。これは、目で局面的な動きや変化を確認するのが困難な場合が多く、「状態」として捉える傾向があるためである。この点は CV においてもあてはまる。つまり、動作の局面性が目で確認できない CV に関しても「状態」として捉えられるのである。

しかし、こうした JV とは異なる CV の統語的特徴は、日本語母語話者にとっての盲点となりやすい。

日本語の感覚からすると、CV も心理を表す動詞である以上、JV のように、動詞的文法ルールを遵守するものだと思われやすく、動作動詞とも一致するだろうというイメージが形成しやすい。よって、CV は、形容詞にも類似する用法をするのだということを日本語母語話者は気づきにくい。

このように、中日両言語の心理動詞の統語的相違は、“了”の誤用につながる原因の一つであると考えられる。

4. 「た」と“了₁”

中国語の“了”は、大きくアスペクト助詞“了₁”と語気助詞“了₂”に分けられるが、日本人学習者が「た」＝“了”の発想で「た」にあてる“了”は、“了₂”ではなく、“了₁”である。そのため、本節では、“了₁”を取り上げ、「た」との比較を行う。

日本語において、「た」は過去を示す助動詞であり、その主な役割は「時制」を表すことである。即ち、発話時を基準に、それより前に発生したことであれば、「た」を付けることが求められる。

(7) 昨日は映画を見た。

＊昨日は映画を見る。

このように、「た」は時間を基準にしているため、動詞そのものには焦点は当たらず、制限も加わらない。ゆえに、「た」は動作動詞のみならず、状態動詞や心理動詞にも付加することができる。

(8) その時、私は中学生だった。

＊その時、私は中学生である。

(9) 小さい頃、歯磨きを嫌がった。

＊小さい頃、歯磨きを嫌がる。

興味深いことに、「た」は動詞にとどまらず、形容詞にまで適用されている。

(10) 先週、寒かったね。

＊先週、寒いね。

一方、中国語の“了₁”は、まったく異なる文法的特質を有している。

“了₁”は、アスペクト助詞であり、動作や行為の「完了」の局面を表す。「完了」という局面に達した動作や行為は、往々にして過去に行われたものであるため、中日対訳においては、“了₁”と「た」が対応するように見えてしまうケースが多い。

(11) 彼はビールを二杯飲んだ。

(他喝了两杯啤酒。)

このようなことから、“了”＝「た」という誤解が生まれると考えられる。

しかし、“了₁”は決して「過去」という「時間」と結びつくものではない。言い換えると、“了₁”には時間的要素が含まれない。(12)－(14)から分かるように、「過去」を示す時間詞があったとしても、必ずしも“了₁”が伴われるとは限らない。

(12) 我 18 岁的时候第一次喝酒。

(＊私は 18 歳の時に初めて酒を飲む。)

*我 18 岁的时候第一次喝了酒。
(私は 18 歳の時に初めて酒を飲んだ。)

- (13) 三年前我住在香港。
(*三年前香港に住んでいる。)
*三年前我住在了香港。
(三年前香港に住んでいた。)

- (14) 那是在美国照的照片。
(*それは米国でとる写真だ。)
*那是在美国照了的照片。
(それは米国でとった写真だ。)

実際、“了₁”に関して注意すべきことは、動詞に制約をかける点である。“了₁”は、あくまでも動作や行為の展開における「完了」の局面を表すため、“了₁”を伴う動詞は、動作性をもたなければならない。つまり、“了₁”の使用対象は動作動詞のみである。

そのため、非動作動詞“属于”に“了₁”を付けた(16)は不適格である。

- (15) 我唱了一首歌儿。
(16) *他属于了比较天真的一类人。

前述したように、感情を表す CV も動作動詞ではない。よって、CV は“了₁”との共起は構造上不可能である。

以上をまとめると、「JV + た」≠「CV + 了₁」の理由は、2 点ある。

- ①「た」が表す時制は“了₁”では伝えられない
② CV の後に“了₁”は出現できない

一方、CV は前に「很」を付けると、形容詞と同じ役割を果たすことにも注意したい。日本語では厳密に区別される「面白かった」と「面白い」がともに“很有意思”と表現されるのと同様に、「JV+た」も「JV」も“很 CV”と表現することが可能である。つまり、“很 CV”は単に「JV」だけではなく、「JV+た」についても対応しうるということである。これが(1)－(3)の諸例において“很 CV”の使用を可能にした背景の一つであると考えられる。

5. CV+ “了₂”

中国語の形容詞は、“了₁”とは共起しないが、“了₂”と共起することは可能である。例えば、“天气热了”という中国語文では、「暑かった」という意味ではなく、「暑くなってきた」というような、変化が生じたことを表している。

これと同様、CV も“了₂”と共起することができる。例えば、

- (17) 我本来不喜欢吃羊肉，现在喜欢了。

この例からも、変化が生じたこと（「好きになった」）が読みとれる。

実は、(1)－(3)にある“吃惊了”“感动了”“累了”といった表現は、それ自体は不自然ではない。しかし、それらが(1)－(3)のような文脈に置かれていると、不自然に感じられる。

では、なぜ「CV+了₂」が(1)－(3)のような文脈に相応しくないのか。ここで、「CV+了₂」の意味機能を見てみよう。

- (18) “哪一个？”陈师爷问。走拢去一看，吃惊了。怎么的？黄大老爷早下手了吗？
(19) 客店主人，仆役，好几个女人出来送他们。老人感动了。他把十戈比钱币向四面八方丢出去，用唱歌样的声调说：“再见啊”。
(20) 回家吧，孩子都累了。

(18)の“吃惊了”では、“了₂”を伴うため、心理状態の変化を表している。しかし“吃惊了”を使う際、その後どのような反応が生じたのかを言わなければならないということにも留意したい。つまり、“吃惊了”はその心理変化の意味に加え、後続の動作や行為を導き出す働きがあるということである。後続文「怎么的？黄大老爷早下手了吗？（なんだ！黄爺さんはまさかやり始めたのか）」は、“吃惊了”という心理変化を受けての発言だと受け止められる。(19)の“感动了”も単なる心理変化の描写にとどまらない。お金をまいたり（把十戈比钱币向四面八方丢出去）、まるで歌っているかのような口調で別れを告げたり（用唱歌样的声调说：“再见啊”）したのも、感動したからである。(20)は、因果の順序を置き換えた文であるが、後から補足された“累了”という心理変化があるから“回家吧”という提案がなされたのである。こう考えると、“累了”も、心理変化のみを表すわけではない。

よって、「CV+了₂」は、単に外部刺激によって心理変化が起きたことを表すだけではなく、その心理変化が故に、何らかの行為・活動が起きるというニュアンスも持つ。これを図示すれば、以下のようなになる。

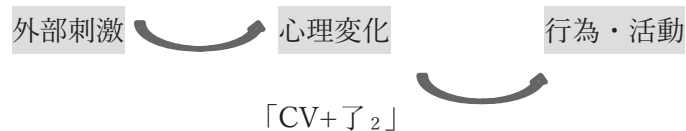


図1：「CV+了₂」の文脈

ところが、(1)－(3)は「CV+了₂」が適する文脈とはなっていない。

- (21) * 看到那些高楼时，我吃惊了。((1) 再掲)
→ 看到那些高楼时，我很吃惊。

- (22) * 爬上长城，我感动了。（(2) 再掲）
→ 爬上长城，我很感动。
(23) * 这本书 300 页！我读完了，非常累了。（(3) 再掲）
→ 这本书 300 页！我读完了，非常累。

上記の 3 例の文脈は、以下の通りである。



図 2：「很 + CV」の文脈

上記の 3 例は、外部の刺激によって生まれた心理状態そのものに着目する文脈である。この場合、心理変化というプロセスが後景化され、変化後の心理状態を表現するのに重きが置かれるため、「很+CV」が用いられるのが一般的である。

6. 中国語教育への提言

中国語学習者の会話や作文では、心理動詞と“了”の共起による誤用が多く見られる。しかし、これまで、心理動詞と“了”の共起関係に関する研究はほとんどなされておらず、その誤用を防ぐための対策もあまり検討されていない。

そこで、本稿では、中日両言語の比較対照を通して、心理動詞を伴った“了”の誤用の原因を明らかにした。

以下、ここまでの分析結果を踏まえ、中国語教育への提言を行いたい。

- 1) 「た」≠ “了”ということを指摘すべきである。
- 2) 心理動詞は、形容詞と同様な文法的振る舞いもすることを指摘すべきである。
- 3) 「～， 很+CV」というパターンを教授すべきである。
- 4) 「CV+ 了」の用法は初級学習者に不向きなため、中級段階で教授すべきである。

参考文献

- 荒川 清秀
2010 「“了”をいかに教えるか」『中国語教育』8、1-17。
工藤 真由美
1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』ひつじ書房、東京。
劉 月華ほか
1996 『現代中国語文法総覧』くろしお出版、東京。
日本語文法学会編
2014 『日本語文法事典』大修館書店、東京。
杉村 博文

- 1994 『中国語文法教室』大修館書店、東京。
郭 春貴
2010 「“了” 的病句傾向」『中国語教育』8、39-45。
蘆 濤
2007 「汉语助词使用错误分析」『広島外国語教育研究』9、139-154。

用例出典

北京語言大学 BBC 語料庫 (BBC) <http://bcc.blcu.edu.cn/>

付録

常用心理動詞リスト

a 爱 爱慕 爱惜 安静 b 悲伤 鄙视 不满 c 吃惊 冲动 崇拜 d 担心 e 饿 f 烦 愤怒 g 感动 高兴 h 害怕 恨 后悔 糊涂 怀念 怀疑 欢喜 j 骄傲 焦虑 激动 嫉妒 紧张 纠结 k 开心 渴 渴望 快乐 困 l 累 冷 冷静 理智 留恋 m 满意 满足 矛盾 蔑视 n 难过 难受 p 盼望 佩服 q 谦虚 轻视 轻松 清醒 庆幸 r 热 s 伤心 生气 失望 t 讨厌 疼 痛苦 痛恨 w 委屈 无聊 x 喜爱 喜欢 希望 嫌弃 羡慕 消沉 小心 兴奋 y 厌恶 遗憾 疑惑 勇敢 忧伤 犹豫 z 憎恨 着急 珍爱 珍惜

本研究課題は「日本語母語話者の中国語中間言語コーパスの構築とその応用」(基盤研究 C : T22K007100) と「ユーザー中心設計による中国語教育文法の構築」(基盤研究 B : A22H006836) での研究の一部である。